

30 ジョルジョーネの《追悼画》

2020

真鍋友範

ジョルジョーネは16世紀初頭のヴェネチアに於いて、《追悼画》という近代的モチーフの絵画分野を創始した開拓者だった。

しかし、ジョルジョーネの早過ぎた死によって、ジョルジョーネの近代絵画は、その意味を正しく後世の人達に伝えることなく、言わば蕾のまま、その追悼画という近代絵画の役割を終えたのだった。

近代絵画の始まりの定義は様々あるようだが、17世紀バロック美術の開始を待つことなく、16世紀ルネサンス最盛期のジョルジョーネによって近代絵画は既に始められていたという証拠があるのだ。

~~~~~

### 1 近代絵画の定義

まず、近代絵画と何を意味するのか。その定義が必要だ。

ポピュラーな定義の一つは、19世紀フランスでの第一回印象派展とするもので、印象派以降のサロンの権威に反抗した画家たちがその創始者とする考え方

がある。

早くてもバロック期、多い認識としては19世紀というのが、大体の共通認識だろう。

では、【近代絵画に共通の特徴】とは何か。それは、西欧の伝統的宗教画題からの開放があることなのだ。

では、ジョルジョーネについて見てみよう。

ジョルジョーネは注文による宗教画もあるが、16世紀以降の絵画は、そのかなりの枚数が故人を偲ぶ目的で描かれた《追悼画》だ。



《テンペスタ》



《田園の合奏》



《羊飼いの巡礼》

また、ジョルジョーネの病死により、当事の弟子ビオンボが描いたと考えられる「三人の哲学者」もまた同様の《追悼画》だ。



《三人の哲学者》

恐らくこの絵画は、ヴェネチア貴族がジョルジョーネ工房に注文した、【亡き親族を偲んだ追悼画】なのであろう。ジョルジョーネの早逝によりピオンボが代筆完成させた作品と考えられる。

《三人の哲学者》というか題名は、恐らく誤りの題名だと考えられる。

亡き人物の背景を田園風景の天上界として描く点は、ジョルジョーネの追悼画形式そのものであり、ジョルジョーネの他の追悼画作品との共通点だ。

\*詳しくは《眼鏡の聖マタイ》内のネット論文を参照

これらは、当時ヴェネチアの貴族階級や裕福な商人からの需要のあった《追悼画》だ。

つまり、【描画対象となる人物が故人となった後に注文された絵画】である

「三人の哲学者」も含め、これらの4点は《追悼画》である点だ。

さて、再度強調する重要な点は、これらが《宗教画》でも《歴史画》でも帝たてなく、《追悼画》という【故人を偲ぶ目的で描かれた画面合成絵画】である点にある。

つまり、【描かれた対象が、注文者の身近な人物である】ことなのだ。

背景としての16世紀ヴェネチアは、オスマン・トルコからの攻撃の危機の時期にあったものの、地中海貿易によって、巨万の富を蓄積していた。

その地中海貿易に従事する裕福な貴族階級は、海難事故やイスラム圏商人との抗争などで親族を突然失うことも稀ではなかったと考えられるのだ。

当時は写真などなく、親族が故人を偲ぶには画家に故人の生きていた当時の姿を描かせることへの要望が起こったことはありえるだろう。

つまり、この【故人を偲ぶ絵画への要望の興隆】こそ、ジョルジョーネに向かった注文の根拠であったと考えられるのだ。

ジョルジョーネはその追悼画注文に対して、独特な形式の表現で答えたのだ。

つまり、その独特な表現とは、【対象人物を暗くて不鮮明な顔で描くこと】、【背景を肖像画の背景とは異なる形式、そして【追押悼画における故人と田園の風景との画面合形式】を編み出したのだ。

故人の顔を、暗く不鮮明に描く理由として考えられるのは、故人を偲ぶ親族がそこに故人の面影を重ね易くする為と考えられる。また、背景を通常の故人

の活躍していた環境の風景にしないのは、既に亡くなった人物であることを示すジョルジョーネ独特の形式であったのだ。

もう一度先ほど挙げたジョルジョーネの3作品を見て欲しい。

ピオンボの作品は、形式は真似て描かれているものの、故人の顔を暗く不鮮明に描いていないこと、そして背景に叙情性のある田園風景を描いていない点において、ジョルジョーネ作品と区別される。

このジョルジョーネが生み出した独特の追悼画形式は、当時人気であったと思われる。なぜなら、ジョルジョーネの亡くなる数年間、ジョルジョーネは繰り返しこの形式で上記の《追悼画》を描いているからだ。

さて、ジョルジョーネが【近代絵画の早過ぎた開拓者であった】と判定する根拠は、描く表現を通して【人の内面心理や、日常生活での人の習慣的行動】を描いている点にある。

では、具体的に再検証しよう。

テンペスタ（嵐）でジョルジョーネが表現したのは、嵐の始まりを示す稲妻の光を直接見ながら故郷の街に残した母子の安否を気遣う兵士の不安心理であり、稲妻の音を聞きながら、遠く離れた夫の安否を気遣うビーナス姿と

して表現された妻の心理だ。兵士は故人であり、顔が暗く、しかも不鮮明に描かれている。一方の妻は、ビーナス姿の天上人として描かれている。

テンペスタは、夫と妻が相互の安否を心配する【家族愛】がテーマの絵画だったのだ。つまり、【この絵画は生前の仲睦まじかった夫婦を描いた追悼画なのだ】。

同様に、【《田園の合奏》は、生前音楽を愛した人物への追悼画】だ。地上の牧童の奏で始めた音楽に合わせて、天上界の故人がまさに友人と演奏を始める瞬間の絵画だ。

また、【《羊飼いの巡礼》は、信心深かった人物を聖書の物語中の登場人物として描いた追悼画】だ。故人は中心部の暗い顔の人物だ。

故人であり、同時に主役として描かれた人物が誰であるかは、共通して【顔が暗く、不鮮明に描かれている人物が存在する】ことから容易に判定できる。

しかしながら、《カステル・フランコ祭壇画》では、兵士の顔がそれほど暗く不鮮明に描かれていないのでは、と反論が生じるのかもしれない。確かに顔の表現は、暗く不鮮明ではないのだが、ヘルメットを被っているので、この場合も、あまり明確な表現ではない点において暗い表現の顔と同様なのだ。



《カステル・フランコ祭壇画》

《カステル・フランコ祭壇画》は、注文を受けた貴族の為にジョルジョーネが描いた追悼画だ。

これら、【人の内面心理や、日常生活での人の習慣的行動】を追悼画とし、《》で、当時は珍しい画面合成の手法で描いたジョルジョーネだったが、1510年ペスト？に罹患して早逝してしまうと、ビオンボの《三人の哲学者》のような、本来【宗教的肖像画】であったジョルジョーネ作品は、別の題名に改名され、追悼画であったことなど忘れ去られたと考えられる。

結論として、ジョルジョーネが、あまりにも早い時期に【近代的感性の絵画】を描いた為、その正当な追従者が連続して出現しなかったのだ。

例えるなら、13世紀後期ゴシック時代に於けるジョットの出現が、あまりにも早すぎて、ルネサンスの真の幕開けには100年余り早すぎたことと似ているとも言える。

さらに言うなら、ジョルジョーネの絵画は、一般的な概念での近代絵画を最少でも100年先取りした天才的な絵画表現であった。

絵画表現上においては、その【卓越した画面合成能力と人物の内面表現能力に於いて、同時代のルネッサンス画家を越えた画家であった】と言っても過言ではないだろう。